

異世界魔王と召喚少女の奴隷魔術Ω

— MP切れ再び —

むらさきゆきや

リフェリア王国西方の辺境都市ファルトラ。じわじわと汗ばむほどの日差しが降り注いでいた。石畳には、真っ黒な濃い影が落ちてくる。

大通りに面した石造りの建物の一つに、年季の入った看板が掛かっていた。

宿屋《安心亭》だ。

二階の奥に、大部屋があった。

木箱のベッドには藁が敷き詰められ、がさがさした麻のシーツが被されている。

ディアヴロは大の字になって寝転がり、ぼんやりと天井を眺めていた。

でかい溜息をつく。

「はあああああ~~~~~……………」

MP切れだった。

このMORPGクロスレヴェリによく似た異世界では、MPがなくなると気力がなくなる。何もする気がなくなり、昼でも夜でもぼんやりと過ごしてしまう。

MP回復ポーションでもあれば一瞬で復活できるが、今のディアヴロには持ち合わせがなかった。

——最近、暑くて、寝不足だったからなあ。

よく寝ないとMPは自然回復しない。そんな学びを得たが、今はどうでもいい気分だった。

気力がないと、全てがどうでもいいと感じてしまう。

置物と化したディアヴロの視界に、黒髪の少女が入ってきた。

ピクピクと豹耳が揺れる。

ひよこひよこ尻尾が振られる。

「……ディアヴロ、いつまで寝ているつもりですか？ もう昼を過ぎています」

豹人族の少女レムだ。豊かな起伏を持つ種族のはずだが……とてもスレンダーで、引き締まった身体つきをしていた。

ディアヴロは無気力そのものの声でつぶやく。

「暑い」

「……ファルトラ市周辺は、いつもは過ごしやすい地域ですが、南からの風が強く吹いているときだけ、蒸し暑くなりますから」

「レムは涼しそうだな」

彼女の衣装は、胸元と腰周りだけを覆っており、お腹も背中も手足も露出している。金属の手甲や脚甲を今は外していた。

「……動きやすさの為に、涼しくもありますね。あなたも同じような格好をしてみますか？」

「あ、いや、ない」

自分がレムと同じ衣装を着た姿を想像してしまう。軽く吐きそうになった。彼女が肩をすくめる。

「……お腹が空かないのですか、ディアヴロ？ 昨夜だってあまり食べていなかったのに、朝食も抜きで」

「うーん」

寝不足のせいかな、食欲も乏しかった。

「……なにか食べたい物はありませんか？」

「え？ そうだなあ……冷やし中華……」

レムが首をかしげた。

「……ヒヤシチュウカ？ それは何ですか？」

リフェリア王国にも麺料理は存在するが、ラーメンではなくスパゲッティに近い。そして、冷たい料理は見かけなかった。

冷蔵庫が存在しないのだから当然だ。この地域は温暖で、氷なんて魔術の産物でしかなかった。

それでも、このファルトラ市の食事は意外と美味しい。

野趣溢れる食材が使われ、パワフルだ。

味付けとしては、塩とビネガーとオイル。よくワインやチーズが加えられている。

元世界でいえばイタリアンに近いが、もっとシンプルで素朴な味わいの料理ばかりだった。

——悪くないんだけど、和食や中華が食べたくなるんだよなあ。

レムが考えこんでしまったので、適当に誤魔化す。

「なんでもない。気にするな」

「むー……」

納得していない様子だ。

ギィ、とドアの開く音がした。

底が抜けたように明るい声をあげ、もう一人の少女が入ってくる。

「やつほー、ディアヴロ！ レム！ たっだいまー!!」

「お帰りな……シエラ!？」

珍しくレムが声を裏返らせた。

何事か、とディアヴロはわずかに頭を起こして、シエラへと視線を向ける。

——水着!？」